

知識探訪

多民族社会の横顔を読む
協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

マレー・ムスリムたちのクリスマス

多和田裕司（大阪市立大学大学院文学研究科教授）



クリスマスシーズンを迎えたマレーシアのショッピングモールの様子（筆者提供）

仕事柄、学生たちにマレーシアについて話をすることが多い。そんなときに見せた一葉の写真に学生から興味深い反応が返ってきた。それは、「厳格な」教えであるイスラムに帰依するムスリムたちが、なぜクリスマスを楽しんでいるのかという素朴な質問だった。

例年この時期になると、多くのショッピングモールで盛大なクリスマスデコレーションが飾り付けられる。昨年、今年と、新型コロナウイルスの影響でマレーシアを訪問することがかなわずにいるが、インターネット上の映像などを見るとクリスマスのデコレーションは健在に見える。家族連れやカップル、観光客など多くの人が思い思いにクリスマスを楽しむ姿は、今やマレーシアの風物詩といえるかもしれない。

マレーシアはイスラムを国教とし、ムスリムが人口の過半数を占める国である。そんな中で、なぜクリスマスが盛大な行事となっているのであろうか。マレーシアが多民族、多宗教の国であることや、マレーシアのイスラムが「寛容」であるといったことも、この問いへの答えとなり得るかもしれない。

あるいは、マレーシアでも会員制交流サイト（SNS）でのやりとりがとて盛んであるが、クリスマスの飾りは映画のようなファンタジックな背景として格好の「映え」要素であるからということも考えられるし、クリスマス行事が宗教行事ではなくイベントとして受け取られている可能性も答えの1つであろう。

このようなクリスマスの風景に対して苦言を呈する人々が一定数いることも事実である。

いわく、ムスリムは「メリークリスマス」という言葉を用いてはいけない、サンタクロースの赤い帽子をかぶってはいけない、クリスマスは西洋の価値観を浸透させる等々、イスラムを厳密に捉える（捉えたい）人々からすれば、イ

スラムと他宗教との境界が薄れたり、乗り越える人が出てきたりするような事態には、常に警戒的であらねばならないのであろう。

しかしそのような批判も、クリスマスの「楽しさ」の前には霧散してしまっているようにみえる。

筆者がマレーシアに関わりを持つようになって30年以上になるが、この間に大きく変わったことが2つある。

1つは人々を取り巻く物理的環境とでもいえるもので、住居や交通網、コミュニケーション手段などにおける変化である。カンボン（田舎）に暮らし農漁業を営むマレー系といったステレオタイプはもはや消滅し、大都市郊外の住宅地から軽量高架鉄道（LRT）や都市高速鉄道（MRT）を利用してスマートフォン片手に通勤する姿こそが、いまのマレー系の現実であろう。

もう1つの変化は、自由と民主主義、個の尊重と平等、多様性の擁護など、言ってみれば現代世界に「普遍的」とでもいえる価値観の広がりや定着である。もちろん、これらの価値観の浸透度合いは人によってさまざまであろうし、過去にこれらの価値観がなかったというわけでもないだろう。しかし、今や多くの人々に共有されていると言って過言ではない。

これら2つの変化は、一言で言えば外面、内面の双方において現代世界に共通するものの広がりやみることができるといえる。その結果もたらされるものは、われわれと（同時にそれはある程度の経済力を有する世界の人々と）同じような意識や行動や生活様式にほかならない。

筆者には、クリスマスを楽しむムスリムの姿こそが、多様なものの共生や社会の豊かさといった、世界が目指すべきゴールを示しているように感じられる。教義のみに着目すると、われわれからは「厳格」で近寄りたく感じられるイスラムも、一人一人のムスリムの実践を見ると、ムスリムもまた自分たちと同じ現代世界に生きる「人」であることが理解されるのではないだろうか。

< 筆者紹介 >

1961年、大阪府生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科修了。博士（人間科学）。専門は文化人類学。クランタン州をはじめとしてマレーシア各地でのフィールドワークに従事。マレーシアを手掛かりに現代世界におけるイスラムの在り方を捉えるべく研究を続けている。著書に『マレー・イスラームの人類学』（ナカニシヤ出版）など。